

武蔵野日曜集会 復活節

マリヤよ！ ラボニ！

——ヨハネ伝第20章1～23節——

1971年4月11日（武蔵野）

小池辰雄

ナルドの香油 あるがままの自分を全部投げかけていく 無的投入 自分を神さまに全託して
動かされる 逆説的・逆語的な叫び 霊震 「マリヤ！」 「ラボニ！」 名前の呼びっこ 聖霊
の権威 霊体のキリスト

【ヨハネ20・1～23】

1 一週のはじめの日、朝まだき暗きうちにマグダラのマリヤ、墓にきたりて墓より石の取除けあるを見る。2 乃ち走りゆき、シモン・ペテロとイエスの愛し給いしかの弟子との許に到りて言う『たれか主を墓より取去れり、何処に置きしか我ら知らず』3 ペテロと、かの弟子といでて墓にゆく。4 二人ともに走りたれど、かの弟子ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、5 屈みて布の置きたるを見れど、内には入らず。6 シモン・ペテロ後れ来り、墓に入りて布の置きたるを視、7 また首を包みし手拭は布とともに在らず、他のところに巻きてあるを見る。8 先に墓にきたれる彼の弟子もまた入り、之を見て信ず。9 彼らは聖書に録したる、死人の中よりその甦えり給うべきことを未だ悟らざりしなり。10 遂に二人の弟子おのが家にかえれり。

11 然れどマリヤは墓の外に立ちて泣き居りしが、泣きつつ屈みて、墓の内を見るに、12 イエスの屍体の置かれし処に白き衣をきたる二人の御使、首の方にひとり足の方にひとり坐しいたり。13 而してマリヤに言う『おんなよ、何ぞ泣くか』マリヤ言う『誰か、わが主を取去れり、何処に置きしか我しらず』14 かく言いて後に振反れば、イエスの立ち居給うを見る、然れどイエスたるを知らず。15 イエス言い給う『おんなよ、何ぞ泣く、誰を尋ぬるか』マリヤは園守ならんと思いて言う『君よ、汝もし彼を取去りしならば、何処に置きしかを告げよ、われ引取るべし』16 イエス『マリヤよ』と言い給う。マリヤ振反りて『ラボニ』（釈けば師よ）と言う。17 イエス言い給う『われに触るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり。我が兄弟たちに往きて「我はわが父、即ち汝らの父、わが神、即ち汝らの神に昇る」と言え』18 マグダラのマリヤ往きて弟子たちに『われは主を見たり』と告げ、また云々の事を言い給いしと告



げたり。

19 この日、即ち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼るるに因りて居るところの戸を閉じおきしに、イエスキたり彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』²⁰ 斯く言いてその手と脅とを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。²¹ イエスまた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣し給えるごとく、我も亦なんじらを遣す』²² 斯く言いて、息を吹きかけ言いたもう『聖霊を受けよ』²³ 汝ら誰の罪を赦すともその罪ゆるされ、誰の罪を留むるともその罪とどめらるべし』

●ナルドの香油

1971年の復活節がまいりました。今日は珍しくヨハネ伝でこの復活節のところを学びたいと思います。その前に、マルコ伝14章をちよつと開いてもらいます。3節から、

「³ イエス、ベタニヤに在して、癩病人シモン^{あるおんな}の家にて食事の席につき居給うとき、或女、価高き混なきナルドの香油^{あるおんな}の入りたる石膏の壺を持ち来り、その壺を毀ちてイエスの首に注ぎたり。⁴ ある人々、憤りて互に言う『なに故かく濫に油を費すか、⁵ この油を三百デナリ余に売りて、貧しき者に施すことを得たりしものを』而して甚く女を咎む。⁶ イエス言い給う『その為すに任せよ、何ぞこの女を悩すか、我に善き事をなせるなり。⁷ 貧しき者は、常に汝らと偕におれば、何時にても心のままに助け得べし、然れど我は常に汝らと偕におらず。⁸ 此の女は、なし得る限りをなして、我が体に香油をそそぎ、預じめ葬りの備をなせり。⁹ 誠に汝らに告ぐ、全世界、何処にても、福音の宣伝えらるる処には、この女の^な為しし事も記念として語らるべし』」（マルコ14・3～9）

これは全福音書に出てます。マタイ伝26章、マルコ伝14章、ルカ伝7章、ヨハネ伝12章に出ている。記事の内容にはいろいろ細かい違いはありますが、マタイ伝とマルコ伝は「ある女」とあり、ルカ伝では「罪ある一人の女」、ヨハネ伝では「マリヤ」となっている。

今日出てくるところの、「マリヤよ」とキリストが語られているところの、その「マリヤ」というのは「マグダラのマリヤ」のことで、このマルコ伝の「ある女」というのがそうではないかと私は思うわけです。学問的には誰もつきつめることはできないけれども。非常に救いがたきような女性であった、その人がキリストに完全に救われて、その喜びのあまりに、とっておきの香油を——「ナルドの香油」というのは非常に高価なものです。「ナルドの香油」の話はかつて詳しくやりましたから、今日はいたしません。「アラバストロン」という壺で、ナルドは本来はインドの方から入ってきたところのものです——この壺をこ



ぼちて、イエスの頭に注いだという。

壺を割ったということは、もう残さないでことごとくということ。あの貧乏な寡婦が自分の生命の代を、たったレプタ二枚を全部賽銭箱に投げ入れたというのと同じようなことでありまして、自分の全存在をぶちまけてということと同じです。ナルドの香油を、壺を割ってキリストの頭に注いだということは、自分の全身的な感謝の気持をそのままキリストに注いだ。

●あるがままの自分を全部投げかけていく

福音書を見ると、イエスはいつも全的な在り方を——自分を完全に、あるがままの自分を投げ出してぶちかけていくという——そういう魂を本当に愛された。それをよしとされたわけです。そのものがどういう者であってもいいんです。たとえばパリサイ人であってもいい。盗人であろうと何であつてもかまわない。その己を全部ぶちまけるということ。自分は立派だからその一部分をと、自分は富める者だからその一部分を、というのではない。人間的な相対的な状態がどうであろうと、それ自体を全部投げかけていく。

福音を受けるということはただそれだけなんです。福音を受ける受けないは、ただそれだけ。自分の学問で判断してみたり——まあ、聖書にぶつかる知識階級の人は大体そういう角度です——研究して、解ろうとする。わかるわからないの世界ではない。自分を投げかけるかどうかの世界である。福音というものは、これだけは誰でもできるといふ、その一つのことを福音の世界は、キリストは望んでおられる。研究しなければ聖書がわからないならば、聖書は一部の人にしか与えられない書です。

誰でもが本当に無条件に与えられる。それは本当に文字通り無条件の世界です。どのような事態にあつても、死ぬ直前であろうが、断頭台に上る直前であろうが、どのようなことでありましても、あるがままの自分を本当にそのまま神の前に投げ出す。一切の比較を絶したところの在り方。この無条件は誰でもができるはずなんです。ところが、誰でもができるこの無条件をなかなかしないというところに福音が非常に易しくて非常にむずかしいという実に逆説的なものがある。真理というものはそういうものです。今までどれだけいいことをしたとか、どれだけ聖書を読んだとか、もうそんなことはなにも条件にはならない。条件は何かといつたら、無条件なんです。

●無的投入

この「ある女」という「マグダラのマリヤ」はそれをやった。そしたら、キリストはここに、

「此の女は、なし得る限りをなした」

と言われた。「なし得る限りをなした」とは、全的に自分に投じたということです。残らず投ずることが即ち、そういつたあるがままを投ずることが即ち、いつも申し上げている、



無の世界です。それが無者の在り方なんです。人間の実存ということをやいうなら、私の実存哲学は無者哲学である。もう無の世界はどの仕事におきましても、学問においても、芸術においても、真理は結局ここに帰一する。万象帰一、というけれども、もろもろの現象はやはり無の気合に帰一する。この「ある女」は正にその無的投入をしたわけです。自分の中はからっぽなんです。

これはキリストが今、葬られようとしている。「その葬りの備えをした」とキリストが言われた。

「我が体に香油をそそぎ、預^{あら}め葬^{そな}りの備^{そな}えをなせり」

と。あとから香油を塗るのではなくて、先に香油を塗ってしまった。ぶちまけてしまった。「自分を投ずる」ということは、それが正に神・キリストに対する愛なんです。

私は、「担^{にな}い」ということも言います。この「担い」は何かというと、やはり、人のために自分を投ずることなんです。それが本当の担いです。相手がどうであるかどうかであるではなかった。それが本当の担いである。

その最大の投入をした者がイエス・キリストで、キリストの十字架が最大の投入であります。自分の投げ出し、詩篇12篇。十字架上に自分を投げ出した。これは本当に人の罪を、人を完全に担いあげる。人の罪を完全に背負ってしまう。罪を負う「神の羔^{ひつじ}」というでしょ。罪を担うところの神の羔。もうそういうことに、私たちの日常生活の魂の気合がその質になってきたら、何だかしらんけれども、楽になる。そして、底力というけれども、底無き力——底無き力なんてことは今日初めて言うけれども——底無き力になってくる。無底の力であります。底無き力が湧いてくる。

そういう意味において、私はマルコ伝14章は非常に大好きなところですよ。

「⁹誠^{まこと}に汝らに告ぐ、全世界、何処^{どこ}にても、福音^{のべつた}の宣^{のべ}えらるる処^{ところ}には、この女の^{この女}の^の為^{ため}しし事^{こと}も記念として語らるべし」

「この女の^{この女}の^の為^{ため}しし事^{こと}」というのは、ただ香油を全部注いだということではない。この女のしたことは何かというと、自分をぶちまいたということ。ナルドの香油において表れているところの己そのものをキリストにぶちまいた。即ち、キリストに注いだ香油はこのマグダラのマリヤの愛の香りであります。キリストは香油以上の香りを、この愛の香りを受けとった。ただ独り、本当の天涯の寂しき——キリストの寂しきは誰もこれを知らん——その寂しきを受けとったのがこのマグダラのマリヤ、「ある女」と言われているひとである。

そのところはどうしても、今日のヨハネ伝の前に受けとりたいところです。それから、キリストの十字架のところは一昨日、十字架の金曜日の晩の祈祷会でいたしましたから、今日はいたしませんけれども。



●自分を神さまに全託して動かされる

キリストだって——「だって」ということもないけれども——さきほど詩篇22篇で読みましょうに、

「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたもうか」

と、キリストは本当に自分を神さまに全託して動きました。投入また投入して動いていた。ということは即ち、それが本当の義のすがたです。だから、おもしろいね。自分を投げ出してみたら、それは義のすがたであつた。「汝の御意を」と言つて、汝に全託しているすがたが自分の投げ出しです。

もうひとつ別な表現で私が「砕け」と言っているのもそのことです。神の意志を体現していた。孔子が、

「わが思うところ則^{すなは}を越えず」

なんていうのは、それは非常に大した世界だと思ふけれども。それは大した世界に相違ないけれども、「わが思うところ則を越えず」というのは道徳的修養の極致としてそこへ行つたわけですね。けれども、「思うところ」なんてものを問題にしないで、自分を全託していくと、キリストの活ける法則がやつてきて動かすんです。神さまに動かされる。神さまに動かされているんですから、「則を越えるか越えないか」なんてことを心配し顧慮することがなくなつてしまう。

動かされて動くところが本当の自由の世界です。「自由」というと、自分で動くかと思つているんだよな、みんな。自分で勝手気儘に動くのを自由だと思つている。そうじゃない。自分で勝手に気儘に動くとする、今度は自我に囚われてちつとも自由ではない。

ところが、その無者は無我、無私者なんだから、そうしたら、動かされる。神さまが動かす。それに乗つかつてしまつていると、ちょうど、風に乗つかつて自在に飛んでいるところのあの燕みたいなものだ。そういうように非常に自由なんだ。いくら飛行機がどんなに巧妙な機械になつたつて、それは燕なんかの飛び方にはかなわんですよ。これは本当に自由の世界です。

それが本当のキリストの義であつた。神さまの御意を完全に行つたから。聖^{せい}意^い体^{たい}現^{げん}と申し上げているとおり。だから、

「なぜ、私をお捨てになるか。いきなり天界に入れてくださいよ」

と。キリストはいきなり靈化してしまつて天上に行けるひとです。それがどうしても十字架を通らなければならないというのが、贖罪という事態です。

「意味」ではないですよ。聖書の解釈ではない。

「それを贖罪と解する、解釈して信ずる」

なんて、何を言っているかと。大体、聖書の学問の世界だつて、みんな解釈なんだ。

「二千年前のこういう事柄が今の現代においてはいかなる意味をもつか。どう解釈



するか」

とか。意味づけだの、解釈だのと、翻訳ばかりしているんだ。翻訳はいらんですよ。じかじかにその世界を身につけなくては。東洋の儒学でも何でも、あれは解釈でなくて、みんな身につける学び方です。それを道どうという。それでなければどうしようもない。絶対、道からはずれたらいかん。

聖書は毎日、親しまなくてはね。「聖書」ではなくて、「親書」と言ったらいい。わが親書なりと。聖書は親書である。皆さんは「親書」と書いたらいい。「聖書」といつて勿体ぶつてしまうものだから、棚の上にあげてしまつてね、そうするとこれは塵の本になつてしまう（笑）。

●逆説的・逆語的な叫び

そのゲッセマネの祈りで、

「私は天界に行きたいんだけど、汝の御意みこころをなさせたまえ」

と。ここでも、最後の「汝の御意」でもつてキリストは乗り切つてしまった。それで己を投げ捨ててしまった。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまひし」

というのは義の叫びでありまして、

「この義がもし否定されるならば、天地はひっくり返る」

と。その義の叫びは、どうしてもキリストはいつぺん言わなければいけないんです、はつきりと贖罪の前に。

「この義が否定されて、天地は、人間界は貫けるか、立つか」

と。これは大黒柱なんです。

神さまと人間との関係がしつかり立たないような、こんな20世紀なんてものはもう滅びてしまったらいいよ。それこそ、藤井武先生ではないけれども、「滅びよ」だ。藤井先生は

「日本よ、滅びよ」

と言つたけれども、私は

「世界よ、滅びよ」

と言つてやる。私は学校ではつきりと言っていますから。それで悪ければ、いつでも辞める。

「敬天愛人という。天を敬する。天は神でも仏でもいいから、とにかく、絶対的な

るものに対する畏敬の念がなかったら人間はダメだぞ」

ということ、もう中学生や高校生にはつきり言っています。今の若いのは傲慢になつてしまつてしょうがない。私はいつでも捨て身でいきます。もう生命は惜しくはないよ。

キリストのこの縦の線をなくなしたらもうお終いです。これが義です。義であると同時に本当にそれは神を受けとつて——苦しまぎれに言っているのではないんだ——本当に自



分を託してみたら、なんと神さまは凄い力と生命と愛と光のひとだということ。これが本当のまた愛の世界である。義と愛は全く一つなんです。これを義といわんか愛といわんか。義愛という、愛義という。そうしたら、これは人にずっと流れていく。本当の縦が立てば、必ず横が流れいく。横の線が出てくる。そして、本当の平和の世界です。本当の和と喜びとはこのことです。

「モーセの十戒」なんてものは——後半は、「……なかれ」という。「……なかれ」は本当は「…なし」なんだけれども——もつと積極的な福音の表現ができるわけなんです。あれは何といつたつて、ユダヤの、ある意味において律法だから仕方がない。福音の世界は、「…ざるを得ない」世界です。福音は、生命づけざるを得ない、愛せざるを得ない、救わざるを得ない、担わざるを得ない、赦さざるを得ないという、こういうような最も積極的な内容が自然に動いていく。いいですか。なにかというと、

「罪、罪、罪」

なんて言うが、人間は罪咎つみとがのものにもう決まっているじゃないか。そんなものを問題にすることはない。キリストを問題にして、本当に地上を天国にするようなもの凄いバイタリティーを、光を持って動いていくことです。

これが、

「なんぞ、我を捨てたまひし」

というキリストの叫びです。それは何か敗北のような叫びではない。非常な、逆説的な逆、語、的な叫びです。

「この義が捨てられてたまるものか」

というわけです。だから、必ずその義は勝つ。その義が勝ったのが復活なんです。

●霊震

それでは、今度はヨハネ伝にいきましょう。

1 一週のはじめの日、朝まだき暗きうちにマグダラのマリヤ、

この「マグダラのマリヤ」という言葉はこの復活のところでは、マタイ伝でも一番先にでてくる。28章に、

「さて安息日おわりて一週の初の日のはの明き頃、マグダラのマリヤと他のマリヤと墓を見んとて来りしに、」（マタイ28・1）

とある。マルコ伝16章もそうです。

「安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、」（マルコ16・1）

ルカ伝24章では、ただ「女たち」と書いてある。

墓にきたりて墓より石の取除けあるを見る。²乃ち走りゆき、シモン・ペテロ



とイエスの愛し給いしかの弟子

「イエスの愛し給いしかの弟子」というのはヨハネ伝のヨハネのこと。この場合の「愛し給いし」という言葉は「フィレオー」という言葉が使つてあつて、「アガペー」ではない。普通の人間的な愛のことです。キリストの愛は何でも全部「アガペー」かと思つたら、そうではない。キリストは幽霊ではない。キリストはやはり人間として——天界からいらつしやつたからもちろん「アガペー」が中心でありますけれども——そこにはもちろん「フィレオー」という言葉も出てくるわけです。それから、「エロース」という言葉は何も肉欲的なことばかりいうのではないので、あれはとにかく人間の側から追求してやまないような衝動を、ギリシアの哲学では、みんな「エロース」という。理想主義的な衝動もそう言いますから、まちがわないように。ヨハネというのはキリストと性格的には、ある意味では合うんだろうね。

との許に到りて言う『たれか主を墓より取去れり、何処に置きしか我ら知らず』

3. ペテロと、かの弟子といでて墓にゆく。4. 二人ともに走りたれど、かの弟子ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、5. 屈みて布の置きたるを見れど、内には入らず。6. シモン・ペテロ後れ来り、墓に入りて布の置きたるを視、7. また首を包みし手拭は布とともに在らず、他のところに巻きてあるを見る。

なかなか詳しく書いてある。

8. 先に墓にきたれる彼の弟子もまた入り、之を見て信ず。

「見て信ず」というのは、マリヤが言つた通りだということを見てそして信じたということです。

9. 彼らは聖書に録したる、死人の中よりその甦えり給うべきことを未だ悟らざりしなり。

「甦えり給うべき」の「べき」という字は、どうしても必ず甦るという「べき」です。まだよく悟つていないと。

10. 遂に二人の弟子おのが家にかえり。

そここのころの復活の事情については、他の三つの福音書をいろいろ比較して読めばおもしろい。マタイ伝には、

「2. 視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より降り来りて、かの石を転ばし退け、その上に坐したるなり。3. その状は電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。4. 守の者ども彼を懼れたれば、戦きて死人の如くなりぬ。」（マタイ 28・2～4）

と書いてある。大きな地震が来てしまう。これは私は単なる地震と思わない。これは霊的、震です、霊的な震動。霊震が起きて——これは聖霊の働きですよ——大きな岩盤の戸が転がってしまったから、ローマの番兵が驚いてみんな逃げてしまった。



聖書研究家はすぐ、

「そんなことがあるだろうか？」

なんて言って、根掘り葉掘りいろいろ比較研究する。「そんなことがあるだろうか」どころではないですよ。聖書はまだ書き切れないで困っているんだ。そういう次元の違ったもの、凄いいことが顕れてきた。

だから、やはり、この聖書もそうなんです。この言葉の発しているもう一つ奥の世界を全的に受けとるような受けとり方をするひとはほとんど聖書の本当の現実に、根源現実に入れる。そうでなく、上っ面をどうだこうだと言っているひとは、入り口にも入れない。聖書の扉は何で開くかという、体当たりで開くんです。そうしたら、なんと凄いいことだろうと。自分が本当にその中に入ると、知らない間に自分の中に霊震が起きる。この霊震が起きたら、それが聖霊のバプテスマだ。あなた方はみんな霊震の体験があるだろ。私は「霊震」なんていう言葉をそういうことに使ったのは今日が初めてだ。人間が全身的な霊震を起こしたら、これが御霊のバプテスマというんです。はつきり違ってくる。

●「マリヤ！」「ラボニ！」

そういう天使が現われたことがどの福音書にも出ています。

11 然れどマリヤは墓の外に立ちて泣き居りしが、泣きつつ屈みて、墓の内を見るに、^{しかばね}12 イエスの屍体の置かれし処に白き衣をきたる二人の御使、首の方^{ていへ}にひとり足の方にひとり坐しいたり。¹³ 而してマリヤに言う『おんなよ、何ぞ泣くか』

「なんで泣きなさいですか」というわけだな。とにかく、マリヤはキリストに助けられて、キリストを愛していた。死んでしまったと思ったものだから、本当に悲しくて、悲しみの極みで泣いていた。

マリヤ言う『誰か、わが主を取去れり、何処に置きしか我しらず』

「誰かが主を持って行ってしまつて、どこに置いたかわからないんです」と。

14 かく言いて後に振反れば、イエスの立ち居給うを見る、

「イエスの立ち居給うを見る」というのは、イエスであることを知つて、見たのではないです。イエスが居たのだが、とにかく、後に居た人を見た。それをこの記者の方では「イエス」と言つたので、マリヤはまだイエスと自覚していないわけです。

然れどイエスたるを知らず。¹⁵ イエス言い給う『おんなよ、何ぞ泣く、誰を

尋ぬるか』

「なぜ、泣くんだね」と。

マリヤは園守^{そのもり}ならんと思ひて

霊園の番人、働き人であらうとみて、



言う『君よ、汝もし彼を取去りしならば、何処に置きしかを告げよ、われ引取るべし』

「あんたが、もし、この中の人を取り去ったならば、どこに置いたのか教えてください。私はその屍体をいただきたいものです」と。

¹⁶ イエス『マリヤよ』と言い給う。

「おんなよ」と言っているときはまだわからない。ところが、「マリヤよ」と名前を呼ばれて、前にイエスに「マリヤ」という名前を呼ばれたことがあるから、その声を聞いて驚いたんだな。

マリヤ振り返りて

完全にそちらの方に向き返ることです。向き直って、正眼に見てということ。

『ラボニ』（釈けば師よ）と言う。¹⁷ イエス言い給う『われに触るな、我いまだ

父の許に昇らぬ故なり。我が兄弟たちに往きて「我はわが父、即ち汝らの父、

わが神、即ち汝らの神に昇る」と言え』

イエスは霊体でありますが、これにマリヤがしがみつこうとした。ところが、それはいかんよというわけだな。

●名前の呼びっこ

あなた方がどこにいましても、あなた方は自分の名前があるわけだ。そして、救い主キリストに

「主さまー！」

と言う。「先生」ではないよ、今度は。これは今でいうと、英語やドイツ語なら、「マスター、マイスター」という。いつでも、「主よ」と呼べば、あなた方にそれぞれの名前を呼んで答えたもう。あるいは先にあなた方の名前を呼ばれる。

そういうわけで、主と自分との会話は何ということはない。名前の呼びっこです。御名は直ちに実である。名をもつて呼ばれる。また、「主よ」というのは、私たちにとっては共通のキリストに対する名であります。

「主さま」「イエスさま」「キリストさま」

と、どれでもいいですけども、これは本当に実を表わしている名でありますから。

そういう、マグダラのマリヤとキリストの、ただこの名前の言い交わし。ここに無量のものがある。いつでも、それで私たちは直ちにキリストの懷の中に入る。

「触るな」

と仰るけれども、呼べば、その中に入ってしまう。触るところではない。中へ入ってしまう。外から触る世界ではない。中へ入ってしまうんですよ。だから、マリヤが本当に

「ラボニ！」



と言って、キリストの中に本当に入ってしまったえば、触ろうとしないですんだんだ。本当に入っていないらしいから触ろうとした。しがみつこうとしたんだが、しがみつかなくても、中へ入ってしまう。

この、中へ直ちに入る世界、即ち一如一体の世界、これを如実という。如実とか、あるいは一如とか、即如とかいう。この即如の世界。キリストを呼んで直ちにその中に入る。キリストと呼ばれて、キリストは直ちにやつていらつしやる。いいですか。だから、本当はキリストは、

「触るには及ばないよ、私はお前の中にいるよ」

と仰るわけなんです。そんな読み方をするやつは他にいないでしょう。

私たちは、名を呼びかつ呼ばれて、即如、一体となる。一つとなる。相手はキリストですから。だから、もうそこが本当の現実であります。

「マリヤよ！」

「ラボニ！」

と。いいですか、この二つの言葉で私が今言ったところの、この即如の世界をはたとつかまえては。それだけなんです、私が今日言いたいのは。何を左顧右眄^{さこうべん}するかと。我々の世界はもう、ただここに本当の人生の秘訣がある。人生の最大の秘訣はただこのところにある。私が今まで何回復活節を迎えていろいろなところをやったが、今日はやっぱり、最深のところに来た。この、

「マリヤよ！」

「ラボニ！」

という、この言い交わしを皆さんも本当に身につけてください。

もう、はらわたがたぎる。また無限の涙であります。これが本当の——近頃は「フィリング」なんて言っているけれども——本当のフィリングは内側から一つになる世界です。

「触るにはおよばないね」とキリストが仰るわけです、「触るなよ」というのは。

「触るにはおよばない。はい、中にいるじゃないか」

と。それは霊的な世界ではそうなる。

「我はわが父、即ち汝らの父、わが神、即ち汝らの神に昇る」

と言う。もう本当にキリストは一つになっている。だから、ここでもそう言っている。「お前の神は私の神。私の父はお前の父」と。

18 マグダラのマリヤ往きて弟子たちに『われは主を見たり』と告げ、また云々^{しかじか}の事を言い給いしと告げたり。

「本当に主さまに会いました」と——今度は「先生」ではなく、「主」と——言いました。本当に甦って、死んだと思ったら死んだのではなかったと。



私はちょこちょこ神学者のものを讀んだって、神学者というのは解釈ばかりしていて、なかなか本当の意味で復活を受けとつてない。また、無教会はなるほどキリストの復活を単純に受けとつている。受けとつていけるけれども、その素朴さはいいけれども、しかし、本当に甦りのキリストを受けとるならば、霊の世界に、御霊の世界に來なければ。それが思われている受けとり方ではなくして、現実となる。私たちが、甦りのキリストを本当に御霊をもつて受けとつていけば、我々自身が甦りのひとになる。死を知らないひとになる。死の悟りではない。相対的生死を超越したところの真の生の世界、生命の世界であります。だから、本当のクリスチャンは最もバイタリティを持っています。

いいかね。キリストの中に飛び込みなさい。疲れたら、キリストの中に飛び込みなさい。力が出るから。もちろん、肉体的には疲れるから、眠ったつていいよ。僕も寝ますよ。けれども、へこたれてはいかん。

「小池先生と歩くと、足が速くてしょうがない」と言うけれども、しょうがない。

●聖霊の権威

19 この日、即ち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼るるに因りて居るところの戸を閉じおきしに、イエスキたり彼らの中に立ちて言いたもう

おもしろいね。戸が閉じているのに、キリストはやって來た。エックス光線より凄いんだ。

『平安なんじらに在れ』

ヘブライ語で、

「シャーローム・ラケーム」

という。「こんにちは」というわけだ。けれども、この場合は、「こんにちは」というよりも、もつと言葉のとりの意味でしょう。

「なんで、そんなにうろたえたり、疑ったりするか。本当の平安だよ」

と。生命の世界にきたときに本当の平安がある。キリストは本当の平安を持っておられる。平和ではない。平安です。平安がないところに平和なんてありはしない。今のひとは本当の平安を知らんから、「平和、平和」といくら騒いだつて、ちつとも平和にならない。

「平安、汝らにあれ。心安かれ」と。

20 斯く言いてその手と脅とを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。

幽霊ではないんだから。

21 イエスマた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣し給えるごとく、

我も亦なんじらを遣す』

うれしいね、キリストにそう言われたら。言われたらじゃないよ、あなた方は言われているんだよ。



「汝らをつかわす」

「はいっ」

と言って返事ができるためには、御霊が宿っていなければ返事はできない。「さて…」なんてでは。「さて」なんて言うのでは、御霊の手前の世界です。いつなんどきでも、「はい」と言えなくては。我々はキリストに遣わされる者。キリストの原動力を持つ者は遣わされる。

²² 斯く言いて、息を吹きかけ言いたもう

はい、霊体のキリストですから、霊体のキリストから来る息はもう聖霊にきまつている。「聖霊を受けよ」と。

『聖霊を受けよ』²³ 汝ら誰の罪を赦すともその罪ゆるされ、誰の罪を留むると

もその罪とどめらるべし』

という恐ろしい言葉がある。審判の権威だね。また赦しの権威。これはなかなか手放しでそう簡単につかまえられる事態ではありませんけれども。

これが聖霊の権威というんです。しかしながら、聖霊は決してただ審ききつてしまうような、それでお終いのような霊ではない。聖霊は究極的には、およそ悔い改めるものは全部救うところの霊です。背ききつているようなのは仕方がない。どんな悪いことをしても、悔い改めて、悪かったと言え、必ず聖霊の世界は無条件に赦しがくる。

この時に使徒たちはいきなり聖霊を現象的には受けたけれども、まだ本源的には受けなかったでしょう。それを本式に受けるには、まだ祈り待って、そしてついにペンテコステの日に来るわけです。まあこれはもちろん、この恩恵を受けたのは、ひとつの大事な前提の準備をキリストはつくつてくださったにちがいない。けれども今度は、本当に聖霊の降臨の時に、聖霊が降臨して初めてキリスト教の歴史は始まる。降臨を受けながら、またそこから脱落したのもありますよ。

「聖霊を受けた。おしまい」

なんてものではない。けれども、十字架の贖いを通して聖霊を受けたら、この恵みから外れたらもう行きどころはない。

● 霊体のキリスト

このキリストの甦りの復活体は、地上にあつた今までのキリストよりもっと素晴らしき霊体のキリストですから、この霊体のキリストはまた霊界に自在に入って見えなくなってしまう。それは昇天という現象に表れてくる。この霊体のキリストの現実やはり聖霊を受けるまでは本当に受けとることができない。

まあ、「信ずる」ということは、ある意味においてはありますよね、

「キリストは甦ったということを信ずる」

ということ。けれども、それはまだ本当にピッタリこないですよ。私は無教会時代に



くら長いこと聞いていたけれども。「信ずる」ということを先生方も率直に言っておられたから、そういうように受けとっていたけれども、しかしどうも、それが本当に身につかないわけだな。

けれども、御霊のバプテスマを受けてからは、そうではなくなった。このキリストの霊体が、霊的実在というものがなかったなら、もう一切は空の空であるということです。パウロがコリント前書15章に書いているとおりです。

「キリストの復活がなかったならば、我々の信仰は空しい」と言っているが、本当にそうです。

「人生は空の空なるかな。すべて空なり」

という、伝道の書のあれと同じことになる。

どうせ、地上は永くて100年だよ。そうだな、もう90年か80年たてば、ここにいる人はみんな向う側になる。私はもちろんだ。地上の生涯というものは限られているわけです。しかしながら、我々が肉体的に地上から消えても、絶対界、霊界においての実在というものがある。私が謳いたいのは、その霊界の絶対界の、キリストの、神さまの、神界の実在なんだ。それは黙示録に語られているところの事態です。それを今、現在、私たちが現有しなかったなら、現在の根源の現実として身体の中にそういった新天新地の双葉を、予表を既に持つていなかったら、信仰なんて言ったってつまらないよね。希望は現在していません。

「天国は汝らのうちにあり」

とキリストが言われたその世界を今、地上において持つていなかったら。

復活節は、キリストを受けとった者は、十字架によって完全に贖い突破させられ、砕かれ、この復活によって本当に一切の相対的現実を突破してしまった者は、それが私たちがこの復活節を迎えているゆえんですよ。相対的現実を突破した絶対現実に入っているというところが、我々がキリストの復活と偕に生きているということ。そうしたら、一切を済度していく、救っていくところの包括的な、包摂的なもの凄いものが現われてくる。この、

「マリヤよ！」

「ラボニ！」

というこの応答において、私たちはその現実を直ちに受けとっていく。主さまも、この今日の私たちの受けとりを飲んでくださっていると信じております。

私はかつて1954年の復活節に書いた「キリストの霊生」という詩があるから、まだご存じない方もあるので、読んで聞かせます。（省略。小池辰雄著作集第8巻『詩歌集』第127頁参照）

136頁参照

